Newspaper in Education

NIEニュース

エヌ・アイ・イー

Newspaper in Education

第105号
2025.2.15

◉特集・新聞で培うメディアリテラシー▶1〜3　◉第15回「いっしょに読もう！新聞コンクール」表彰式▶4〜5
◉新聞の「今」――世論調査 もっと使える社会に▶6　◉ NIE アドバイザー紹介／フラッシュニュース▶7
◉〈NIE でいきいき〉〈NIE あれこれ〉▶8

©2025年 日本新聞協会

編集・発行　一社団法人 日本新聞協会　TEL：03-3591-4410（NIE担当）　FAX：03-3592-6577　e-mail：nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町 2-2-1　日本プレスセンタービル　[https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

特集

新聞で培うメディアリテラシー

フェイクニュースや偏った情報があふれ、SNSが選挙に影響を及ぼす昨今、情報の真偽や価値を見極めるメディアリテラシーの育成が急務だ。巻頭はネット社会でNIEが果たす役割について考察いただき、小中高の先生方には実践例を紹介いただいた。

立命館大学
産業社会学部教授
柳澤　伸司

SNSの利用やネットの検索機能は便利で、それに慣れるとやめられない。使えば使うほどアルゴリズムが働き、エコーチェンバーやフィルターバブルを自覚することなく、自分の志向と合う情報に依存していく。簡単に答えを求め、意見が異なる相手を理解しようとしない傾向もメディアの使い方によるものだ。スマートフォンやタブレット端末が家庭や教育現場で児童・生徒たちのもっとも身近な情報受発信ツールとなっているが、それは誰もが「メディア」になるということを意味する。情報の真偽や価値を見極める力だけでなく、メディアを使うための「作法」が必要だ。

■誰もが発信者の時代に■

これをNIEとの関わりのなかで考えてみると、身につけたいのは「ジャーナリスト感覚」といえる。ジャーナリズムは報道と言論活動だが、誰もが「いいね」も含めた情報を発信できるメディア状況は、誰もが「メディア＝ジャーナリスト」としての自覚と責任を求められる、新たな時代になったということだ。日々の記録としての日録の積み重ねを意味するジャーナリズムは、「いま、伝えなければならないことを、いま伝える。いま、言わなければならないことを、いま言うこと」（新井直之）であり、価値観を内包するコミュニケーション活動そのものである。この働きを学ぶことがNIEにとって肝要といえる。

そこでジャーナリスト感覚を育てる一つの方法は、自分たちの生活環境（自治）を考えるための「新聞づくり」だ。スクールジャーナリズムはそれをかたちにするもので、「ねばならないこと」を取材して伝える行為は新聞（記者）活動であり、そのコミュニケーション過程を通して、自分たちの民主的な社会を支える多様な意見を共有する機会を作るものとなる。

もう一つの方法は、メディアを考察する他者の考え（知見）に触れることだ。誰しもメディア情報を批判的に読んでいるわけではないし、偽情報かどうかを見分ける読み方を意識的にはしていない。それゆえ「曖昧な情報に耐える力（ネガティブリテラシー）」（佐藤卓己）や「情報を吟味する力」（坂本旬）が必要になる。そこで、新聞のオピニオン欄に掲載されるメディア＝新聞について書かれた記事の活用は有益である。

たとえば、産経の「社説検証」（各紙社説の読み比べ）や「新聞に喝！」（外部識者による同紙への新聞批評）などを読んで、当該の社説や紙面を自分なりに読み比べる（検証する）ことで、クリティカルな視点を蓄積できる。あるいは、毎日新聞のオピニオン欄には「メディア」（の問題）をテーマにしたものが掲載される。なかには誤報も含めて報道過程で生じた問題を検証する記事など、メディアのあり方を考える多様な視点が得られる。新聞に記録されたものを活用することで、ウェブ（書き換え可能なデジタルメディア）とは異なり、「検証（確認）」の大切さを学ぶことができる。新聞づくりでジャーナリスト感覚を、オピニオン欄でメディア（新聞）を考える。それらの活動を継続すれば、メディアとしての新聞＝ジャーナリズムの働きを学び、メディアの「作法」、メディアリテラシーを育むことになる。

メディア比較で育む力

横浜市立荏子田小学校
教諭
浦部　文也

オーストラリア議会は２０２４年秋、16歳未満の子どものＳＮＳ利用を禁止する法案を可決した。リスクの高いオンライン環境から子どもたちを保護することが大人の義務である、という認識に基づく措置だろう。

一方、日本では、従来行われてきた情報モラル教育からデジタルシティズンシップ教育に変化しつつある。一般的に禁止事項を確認し、守らせる指導をすることが多い情報モラル教育に対し、デジタル社会の中で具体的なスキルを学び、自分で考えて行動できる力の育成を目的とするのがデジタルシティズンシップ教育であると考える。

筆者はＮＩＥを通してメディアリテラシーの涵養を図る実践を継続的に行ってきた。その一環として朝日・読売・毎日・産経・東京・神奈川の６紙を取り寄せ、読み比べや地方紙と全国紙の比較などに取り組んでいる。

異なる表現手法学ぶ

こうした取り組みをさらに深めるため、新聞の見出しとYouTubeのサムネイル画像上の言葉を比較・検討する授業も実施している。言葉選びや伝達手法の工夫について学ぶことを目的とした。具体的には、まず見出しを隠した新聞記事をもとに自分で見出しを考え、友達やプロの付けた見出しと比べて気付いた点を共有する。その後、プロが採用した見出しの言葉選びや構成を話し合い、特徴や狙いを整理する。さらに、YouTubeのサムネイルに用いられる言葉選びを、新聞見出しと比較して検討する場面を設け、印象を左右する言葉のインパクトや分かりやすさを吟味する。

これらの活動を通して、新聞や動画プラットフォームで用いられる異なる表現手法を比較し、自ら言葉を選んで発信する力と受け手として情報を読み解く力の両方を高めることが狙いである。単なる知識の習得にとどまらず、さまざまなメディアの意図や特徴を多角的に理解する力を培う点で、この取り組みは子どもたちのメディアリテラシーの涵養に寄与すると考えられる。

他にも、「メディア・リテラシーかるた」（制作＝ＮＨＫ財団、監修：中橋雄・日本大学文理学部教授）を通して、同質的な情報に触れ続け多様な視点を失う現象「フィルターバブル」や「エコーチェンバー」について学習した後、インターネットの情報と新聞の情報を比較する授業を実践した。ある児童の「自分の好きであふれる世界ばかりでは、見えるはずのことが見えなくなっていく」という振り返りの言葉からクラスの議論が深まり、新聞が政治や経済、スポーツから娯楽まで多岐にわたる情報を集約し、公平な目線で伝えている点や、事実確認を重ねた記事の信頼性の高さなどに議論が及んだ。

こうした学びを積み重ねて、多様なメディアの特徴や意図を主体的に捉え、情報社会を生き抜く力を身につけていくことが子どもたちに期待される。

新聞づくりを通して『新聞の価値』を問う

広島市立日浦中学校
教諭
齋藤　紘希

近年、インターネットやテレビといった情報メディアが日常生活に浸透する一方で、いわゆる「新聞離れ」が顕著である。このような状況の中で見過ごされつつある「新聞の価値」を問い、それに対する答えを導き出すことで、生徒の視野も拡大するのではないだろうか。

以上の着想から、新聞制作を通して「新聞の価値」を問う授業実践を構想した。

実践にあたり、総合的な学習の時間を当てた。その上で、**表1**のとおり単元を設定した。

計画①では全30分の時間のうち、15分は新聞（中国新聞、朝日新聞デジタル）、15分はその他の方法（インターネットの検索エンジン、図書室の本など）を使わせた。情報収集時における新聞と他のメディアそれぞれを比較して生徒は、「インターネットは早くたくさんの情報を集めることができるが、地域に関する情報の質は新聞の方が優

表１　単元設定

問い	新聞「ならでは」とは何か ―地産地消新聞づくりを通して―
計画	①「問い」の提示、広島の地産地消に関する情報収集
	② 新聞づくりの題材の決定、レイアウトの決定、役割分担
	③ Google スライドを用いた新聞づくり
	④ 各班の新聞の共有・評価（Google スライド）、「問い」に関するまとめ

れている」などと振り返った。

新聞制作は班ごとに、共同編集可能なプレゼンテーションアプリ「Google スライド」を用いた。完成した新聞は学級全体で共有し、他班の新聞について相互に評価した。**図1**の新聞に対しては、①ブルーベリーについて分かりやすくまとめられている②いろいろな画像と情報が見やすくまとめられていて、班員それぞれの編集後記があり、フレームなど使っていてすごいなと思った③フレームがおしゃれで見やすかった――といった評価が寄せられた。

生徒に多くの気づき

以上の授業を経て、生徒は「新聞の価値」について次のように考察している。

・新聞とインターネットを比べると、新聞の方が必要な情報だけを見出しや記事から素早く得ることができた。どちらも目的や用途に応じて使い分けることが大切だと思った。

・新聞の情報は正しく、写真も載っており、保存することができるから新聞を生活の中で取り入れたい。

本実践によって、生徒は他のメディアと比較しながら独自に「新聞の価値」を考えることができていた。特に「情報選択の容易さ」「情報の正しさ」に気付く生徒が多く見受けられた。

昨今の社会は「新聞離れ」が進み、他の情報メディアが主流となっている。その中で、生徒は新聞ならではの価値に気付き、日常生活で利用しようとする姿勢を培うことができていた。

今後は、本実践をさらに発展させ、情報の真偽を適切に見抜く活動等を取り入れていきたい。

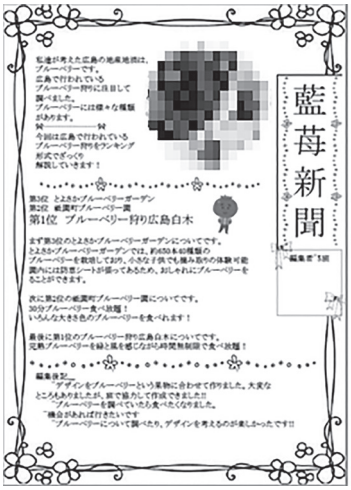


図１　生徒制作の新聞

新聞で深まる教科書の理解

鈴鹿中等教育学校
教諭
井上　智貴

本校4年生（高校1年）のほぼ全員がスマートフォンを所有しており、社会的出来事やニュースに触れる際は専らスマホを活用している。インターネット、SNSは、検索や閲覧がしやすく情報の更新もリアルタイムに行われるため非常に便利な反面「エコーチェンバー」や「サイバーカスケード」などの現象を引き起こす負の側面が取り上げられることも多い。一方で近年の大学入試では、SNSが抱える問題やメディアリテラシーを取り上げた評論文や小論文などの出題が増えており、メディア論における概念の適切な理解も求められる。

以上を踏まえて「自分とは異なる思想に出合う場」「スマホ（ネット）とは異なるメディア」として新聞を活用し、生徒が情報を適切に判断する力を養うための単元を国語科で展開した。

単元構成

①新聞を活用してさまざまなニュース記事を収集し、記事について、オンライン・ホワイトボード・アプリ（Google Jamboard）を使用して「重要度・おもしろさ・難解さ・興味関心度」を自分なりに評価する。

②ネットを活用してさまざまなニュース記事を収集し、①と同様に評価する。

③『ひとまず、信じない　情報氾濫（はんらん）時代の生き方』（押井守著、中央公論新社）を読解する。結論部の「一見、便利で使い勝手がよいネットは、情報から人々を遠ざけてしまった。そのことに早く気づくべきである」という筆者の主張を読み取る。

④「ポスト真実時代のジャーナリズム」（国谷裕子著、筑摩書房『現代の国語』収録）を読解する。④の筆者の主張、③の筆者の主張、各自が①②で記事を集めた際の感想――の三つの共通点を考える。

⑤前段の④「ポスト真実時代の……」について、筆者の主張に対する意見や考えを論述する。

まとめ

単元の終わりに提出した論述では、新聞を普段あまり読まない生徒が「特にニュースの中身を一面でパッと見られることが、インターネットとの違いだと感じる。普段あまり使わない新聞だからこそ新たな発見がある。自分の興味の範囲に限らず、いろんな分野に触れていくことが大切だと感じた」と記述している。

新聞に触れるなかで、「ネットの利便性、娯楽性には落とし穴が潜んでいるのでは？」という意識を抱く生徒も出てきた。新聞を読むという具体的体験を通して、文章中の抽象的概念の理解につながったと感じている。今後は実用的文章の読解力向上を目指し、複数の新聞記事の共通点や相違点を読み比べる学習も展開していきたい。

第15回 いっしょに読もう！新聞コンクール 表彰式

第15回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の表彰式が２０２４年12月14日、ニュースパーク（日本新聞博物館、横浜市）で開かれ、小・中・高校各部門の最優秀賞の受賞者に賞状と盾が贈られた。受賞者はそれぞれが選んだ記事を執筆した記者と懇談し、記事に込められた思いに触れた。

今回は47都道府県から計６万１５７６編（小学生４７０７編、中学生２万５９０３編、高校・高等専門学校生３万９６６編）の応募があった。１次、２次、最終審査会を経て、校種別に最優秀賞を各１編（計３編）、優秀賞を各10編（計30編）、奨励賞を１２０編選んだ。また、団体応募４８１校の中から、優秀学校賞を校種別に各５校の計15校、学校奨励賞１９０校を選定した。

最優秀賞受賞者と審査委員ら

表彰式の冒頭、新聞協会ＮＩＥ委員会の羽根和人委員長（朝日新聞東京本社執行役員広報／ブランド戦略／ジェンダープロジェクト担当）は主催者あいさつで、「コンクールに継続的に取り組む学校は年々増え、今年は過去２番目に多い応募があった。過去の受賞者の中には、新聞記者の仲間として、社会をよくするために活躍している方もいる。記事を執筆した記者も、皆さんが社会のためにできることを一生懸命考えてくれたことに感謝していると思う」と述べ、「これからも新聞を読んで知ったことや感じたこと、考えたことをぜひ周りの人たちと話し合ってほしい。他者への思いやりを持ち、自分とは異なる考えを知り尊重していくことが、よりよい社会の実現につながっていく」と呼びかけた。

文部科学省初等中等教育局教育課程課の上月さやこ教科調査官は、グローバル化が進み多様な価値観が生まれる一方で、国際的な分断やインターネットにおける「フィルターバブル」「エコーチェンバー」といった現象が進んでいると指摘し、「多くの情報を取捨選択して活用する力を養うのに、身近な教材として新聞が大きな役割を果たす」と新聞への期待を寄せた。

続けて受賞者に対し、「自ら考え、自分の言葉で思いを伝える力がこれからはより一層求められる。受賞を契機に、新聞に親しみ、社会や地域への関心を高めてほしい」と祝辞を述べた。

小原友行審査委員長（広島大学名誉教授、日本ＮＩＥ学会顧問）は講評で今年の審査を振り返り、受賞作に共通するキーワードとして「①自己実現」（自分の理想や夢と向き合いながら、成長しようとする姿勢）、「②社会貢献」（どうすればより良い社会や地域を作れるか考え、行動しようという意志）、「③未来創造」（未来へのビジョンを描きどう歩むのかを考える力）を挙げ、「受賞はゴールではなくスタートだ。新聞を通じて学び続け、自分らしい人生を築いてほしい」とエールを送った。

◆原爆の歴史　自分事に

広島県の安田学園安田小学校５年、村上正真さん（小学生部門最優秀賞）は、広島に原爆が投下されて79年目の年に、原爆死没者名簿に関する記事を読み、「自分の家族のことだ」と思った。毎年８月６日は平和記念公園にお参りに行き、家族から名簿に高祖父と曾祖父の名が記載されていると聞いていた。

曾祖母との対話を通してこの名簿の意味を深く考え、名前を刻まれた一人ひとりに大切な人生があり家族がいることに気づき、被爆者の家族として教訓を次世代につないでいくと決意した。

村上さん（右）と副島記者

記事を執筆した朝日新聞社の副島英樹記者（編集委員（広島総局））との対談で将来の夢を聞かれた村上さんは「新聞記者かアナウンサー」と答え、今後は自身が被爆について伝える側になりたいと力強く語った。

副島記者は対談の中で、「10月に日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞した。この年に記事を取り上げてくれたことは運命的だと感じている」と村上さんに謝意を伝えた。記事で取り上げた池亀和子さんも被爆者で、これまで10万人の原爆死没者の名前を名簿に書き続けたとし、「その姿勢と信念をぜひ多くの人に伝えたい

と思った」と取材のきっかけを語った。取材当時、闘病中だった池亀さんは、記事掲載後まもなく亡くなってしまったが、今回の受賞で「池亀さんの思いはさらに多くの人々に届いただろう。きっと天国から村上さんに感謝しているのではないか。この記事が未来へ向けた平和のメッセージとなることを願っている」と期待を込めた。

◆子ども食堂の価値捉え直す

広島大学附属中学校2年、冨田花音（かのん）さんは、叔母が子ども食堂を運営しており、人がつながる場としての食堂の価値に着目した記事を読んで共感した。子ども食堂は各自のできることを持ち寄る「みんなの1％の集まり」と話す叔母との対話から、①助けが必要な人を見つける、②助け合いのネットワーク構築、③幅広い世代の交流に寄与、④子育て中の親の休憩所になる――という四つの具体的な食堂の機能を理解し、多くの人にとってかけがえのない場所になると確信した。子ども食堂を広い概念で捉え直し、地域社会に貢献できる食堂のあり方について考えを深めた。

冨田さん（右）と栾記者

記事を読んだ後、冨田さんは実際に近所の子ども食堂を母親とともに訪ねてみたといい、「祖父母の家で食べるような温かみのあるメニューだった。高齢者や幼稚園児、地域の方たちが和気あいあいと過ごしていた」と感想を述べた。

記事を執筆した中国新聞社の栾暁雨（らんしょうう）記者（呉支社編集部）は、3月に呉支社に赴任して初めて書いた記事だったと話し、子ども食堂について「困っている人だけが行く場所だと思われてしまうと、本当に助けが必要な人たちが逆に行きづらくなる。行ける人が積極的に足を運ぶことが支援につながる」として、冨田さんが実際に子ども食堂を訪問したことをうれしく思うと返した。

◆障害者支える方策を提言

福岡県立東筑高等学校3年、柴田深冬（みふゆ）さんは、応援しているアイドルのコンサートに行くことを日々の励みにしている。普段から新聞の気になる見出しを拾い読みするなかで「コンサート手話通訳」という見出しが目に飛び込み、聴覚障害を持つ人がコンサートを楽しむには高い障壁があることを知った。

「全ての人にコンサートを楽しむ権利がある」という母の言葉に、障害者の願いに寄り添うための環境整備の必要性を感じ、障害者を取り巻く課題について理解を深めた。そして、将来は工学を学ぶ夢を持つ自分や社会全体が、障害を持つ人々を支援するためにできることについて提言した。

柴田さん（右）と梅本記者

西日本新聞社の梅本邦明記者（北九州本社）との対談で柴田さんは、障害者を支援するロボット等の開発に興味があると話し、そのきっかけを「将来の祖母の介護について両親と話し合う中で、介護士不足などの問題を知った。『介護ロボット』を作ることで貢献できると考えた」と説明した。

西日本新聞の子供記者をしていた柴田さんに梅本記者から「若い人に新聞を読んでもらうには」との質問があり、「先日、人気アイドルが大きく映った全面広告が複数の新聞に載り、友達の間でとても話題になった。若い世代に人気のあるタレントや有名人のコメントを記事に取り入れて、興味を持ちやすくできたらいいのでは」と答えた。

最優秀賞ならびに優秀賞受賞者の作品の全文など第15回の結果は、ＮＩＥウェブサイト（https://nie.jp/month/contest_newspaper/2024/）に掲載中。

優秀学校賞受賞校

東京都	北区立東十条小学校
岐阜県	瑞浪市立陶小学校
福井県	大野市上庄小学校
香川県	坂出市立川津小学校
長崎県	聖マリア学院小学校
秋田県	横手市立横手明峰中学校
愛知県	豊田市立藤岡南中学校
福井県	勝山市立勝山北部中学校
香川県	多度津町立多度津中学校
佐賀県	嬉野市立吉田中学校
北海道	北海道富良野高等学校
宮城県	宮城県一迫商業高等学校
東京都	都立墨田川高等学校
愛知県	名古屋市立名古屋商業高等学校
福岡県	福岡県立小倉南高等学校

（15校）

優秀学校賞

団体応募校のうち、小・中・高校各５校の計15校に贈られる。

授賞理由

新聞に触れる日常的な活動を含め、特に熱心に取り組んだ意欲的な学校。全校レベルでの取り組みなど注目すべき点、特色がある学校。

⇔第16回コンクール募集については７ページに掲載

新聞の「今」

内閣支持率をはじめ、政治や社会問題に関する人々の意識を統計データで映し出す世論調査。新聞社はどのように調査・報道しているのか。また、調査結果の読み解き方について、新聞社で世論調査を担当する責任者に寄稿いただいた。

世論調査　もっと使える社会に

朝日新聞東京本社
編集局世論調査部長
金子　桂一

新聞社は毎月、全国の有権者を対象に世論調査を行い、その内容を発表している。世論調査とは、世論の「脈」を取らせていただく仕事だと思っている。シンプルな質問と回答に徹すること。誘導を排し、予断を与えることなく、有権者の思いをすくい取るのが理想だ。

有権者の「民意」のあらわれが選挙だが、国政選挙は、参院選が3年に1回、衆院選は任期4年のうち、いつ解散・総選挙があるかわからない。選挙から選挙までの間、世論調査が果たす役割は大きい。内閣支持率を含めて時々の課題を、有権者がどう考えているのか。臨機応変に有権者の声を知ることが、政治的な課題、社会問題を解決するためのヒントになる。他人の意見を知ることで自分の考えも固まってくる。

調査の多くは電話で実施している。固定電話、携帯電話を対象に、コンピューターで無作為につくりだした電話番号にかけている。最近は、調査員（オペレーター）による電話調査だけではない。固定電話に自動音声（オートコール）で電話をかけたり、携帯電話にショートメールを出したりする調査もある。

「日本の縮図」つくり出す

無作為抽出で１０００人を確保すれば、1億人に電話をしなくても、統計学的に「日本の縮図」をつくりだすことが可能とされる。よくかきまぜた味噌汁の味は、味噌汁をすべて飲み干さなくても、一口味見をすればわかるのと同じだ。

質問は、内閣支持率や政党支持率、比例区投票先など、政治にかかわる質問が多い。ただ、社会的な問題や季節の質問を織り交ぜ、肩の力を抜いて答えてもらえるよう工夫している。

内閣支持率は、有権者の政治への熱量をはかる「体温」だ。内閣支持率の変動に、首相官邸や政治家は「一喜一憂しない」と冷静さを装うが、毎回苦労して集める「国民の声」である。少しは一憂して、政策に生かしてもらってもバチは当たらないだろう。

内閣や政党の支持率は、調査の時期や方法、質問の内容によって微妙に数字が違ってくる。注目してほしいのは、各社の数字の違いではなく、支持率が上向きなのか、下向きなのかという傾向（トレンド）だ。国会で激しい論戦が行われると、与党が守勢に立たされ、内閣支持率が下落する。年が明けると気持ちがあらたまるのか、内閣支持率は上昇する……。政治が不安定化して、これまでのセオリー通りにいかないケースも増えた。

過去のデータと比較することで深掘りの定点観測ができるのも、新聞社の世論調査の強みだ。朝日新聞社が実施した２０２４年12月の世論調査（電話）で、「年賀状離れ」を聞いた。年賀状を「出さない」と答えたのは、57％と半数を超えた。およそ30年前に行った面接方式の世論調査（１９９５年）ではわずか９％だった。

選択的夫婦別姓問題も、定期的に聞くテーマだ。２００９年は賛成48％、反対41％と賛成がやや多い程度だったが、15年には賛成52％、反対34％に。24年は賛成73％、反対21％と大きく差が開いた。これは家族のあり方の変化か、社会が寛容になったからか、「女性の人権問題」との認識の広まりか――。さまざまな分析を通じて、論点を考えることができる。

苦戦する調査手法

ただ、年々従来の方法での世論調査への協力が得られにくくなっている。昨今、「ルフィ事件」や「首都圏の闇バイト事件」など、電話を使った犯罪が激増しているためだ。固定電話は「もっぱら留守電にしている」という家庭も多く、「知らない電話番号には出ない」という人も増えた。

インターネット調査も盛んになってきたが、関心の高い人が集まる偏りが目立ち、無作為抽出とはいえない。「世論調査としては使えない」と判断している新聞社も多い。

ある日突然、有権者の「脈」がとれず、内閣の「体温」がわからなくなる時代が来たらどうなるか。新しい調査手法の研究を日夜進めているが、一つの希望は高校で情報、大学で統計学やデータサイエンスのすそ野が広がっていることだ。世論調査のニュースに触れて、時代を読み解ける未来の有権者が増えてほしい。

新聞コンクール作品募集中！

第16回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の募集を始めました。対象は小・中・高校（高専）生です。学校全体でぜひ取り組んでみてください。詳しくはＮＩＥウェブサイトをご覧ください。締め切りは９月８日（必着）です。

NIE アドバイザー紹介

❶学校名（所属等）❷担当教科
❸NIE 実践歴
❹新聞を活用するうえでの工夫を一言
（敬称略）

●東京都
羽賀　絹恵
（はが・きぬえ）
❶板橋区立成増ヶ丘小学校
❷全科　❸21年
❹一覧性を生かして新聞を「まるごと」活用する。記事の向こうにいる「人」（執筆者・新聞制作関係者・記事中の人等）を意識しながら読む。

●香川県
中山　佳昭
（なかやま・よしあき）
❶多度津町立多度津中学校
❷国語　❸２年
❹ICT を効果的に活用しながら新聞の良さを生徒に伝えている。NIE の実践を通して、生徒の社会への関心を高めていきたい。

●宮崎県
鍋倉　亜衣
（なべくら・あい）
❶宮崎県教育庁義務教育課
❷小学校全科　❸８年
❹子供たちが地域や社会に関心をもち、主体的に関わり考えることができるよう、ねらいに沿った記事選びや提示を工夫していきたい。

NIE フラッシュニュース

◆テーマは「メディアリテラシー」NIE教育フォーラム開催迫る

３月１日、「学校教育におけるメディアリテラシー」をテーマに、第８回ＮＩＥ教育フォーラムをオンライン（Ｚｏｏｍ）で開催します。デジタル空間に真偽不明の情報があふれ、ＳＮＳの隆盛が選挙結果にも影響を及ぼすなか、ＩＣＴとＮＩＥ両方に精通した教育者と、新聞社が発信する正確な情報を支える校閲部門のプロを招き、メディアリテラシー教育の在り方や、情報を吟味して判断する力をＮＩＥでどう育てるのか――などについて、議論を深めます。参加申し込みはＮＩＥウェブサイト（https://nie.jp/）をご参照ください。

◆ＮＩＥリーフレットを刷新

新聞協会はこのほど、ＮＩＥリーフレット「新聞で学びが変わる！」を発行しました。２０２４年に実施したＮＩＥ学習効果調査の結果から、新聞を活用した学びが児童・生徒だけでなく教員の力も伸ばすことをグラフや図表を用いて説明し、教師、教育関係者や保護者にＮＩＥの意義や学習効果を分かりやすく伝える内容となっています。ＮＩＥウェブサイトからダウンロード可能なので、ぜひご活用ください。

リーフレット

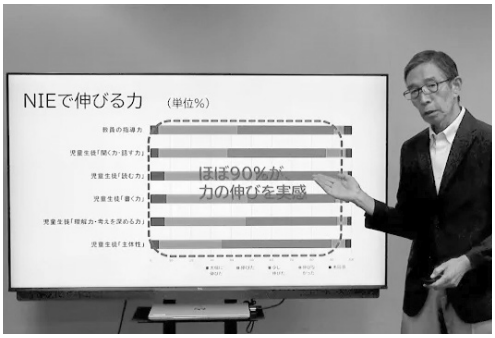
◆第30回全国大会神戸大会の概要決まる　第32回は仙台で開催

「時代を読み解き、いのちを守るＮＩＥ」をスローガンに、７月31、８月１の両日、神戸市で第30回ＮＩＥ全国大会を開催します。初日は神戸ポートピアホテルでテーマに沿ったパネル討議のほか、作家の小川洋子さんによる基調講演、ティーパーティー形式の交流会を行います。２日目は、甲南大学岡本キャンパスで小中高校による公開授業、実践発表などのほか、ポスター展示を予定しています。

第32回全国大会は２０２７年に仙台での開催が決まりました。仙台での開催は第３回大会（１９９８年）以来、２回目です。２０２６年の第31回大会は広島市で開催します。

◆ＮＩＥサイトで新たな動画「ＮＩＥ効果編」を公開

新聞協会は、先生向け動画「ＮＩＥはじめの一歩」シリーズに「ＮＩＥ効果編」を追加しました（https://nie.jp/teacher/）。関口修司ＮＩＥコーディネーターが学習効果調査の結果を解説し、「授業の狙いと社会の動きが結びつくと、子供の意識が変わるだけでなく、先生の指導力も向上する」と実践を呼び掛けています。シリーズではこのほか「主権者教育における記事のトリセツ」などの動画７本も公開中。ぜひご覧ください。



先生向け動画「NIE 効果編」

本校では全校をあげてＮＩＥを展開しており、紙の新聞だけでなく、新聞データベースを使用する場面もある。ここでは図書館で実施している「放課後Cafe」（２０２４年４月「新聞Cafe」から改称）の取り組みを紹介する。

放課後Cafeは、新聞記事を切り口として世の中のことを議論・対話し、理解や考えを深めるイベントで、月に1度開催される。参加は全生徒、教職員を対象とした希望制である。外部の方々がゲスト参加してくださった回もあった。授業で行うＮＩＥとは異なり、評価や時間、表現を気にすることなく自由に自分の意見を述べる場であることが特徴だ。また、あらゆる年齢や所属の人が集う学校図書館で行うため、参加者同士がフラットな立場から多様な見解を交わし合うことができる。実際に中学生も物怖じせず発言する。

生徒にとって参加のハードルは高いものの、常連メンバーの声掛けで「実は気になっていたんだよね」と新規参加者が毎月絶えない。終了の合図をしないと永遠に対話が続き、終了後には毎回、こちらが聞いてもいないのに「楽しかった」の声が聞こえてくる。

満足度が高いのは、新聞の中にあるトピックを、参加者同士が自分の体験談を交えて話し合うからだと考える。この取り組みでは実体験を取り上げることで、世の中（新聞の中）のことを自分事として捉えることを大切にしている。実体験を話す場では共感は生まれても否定されることはないため、安心安全な環境の中で生徒は楽しく自由に発言している。教員からは「教室とは違った生徒の一面が見られる」という声が聞かれる。放課後Cafeが主権者教育の一助となることを願う。

関東学院六浦中学校・高等学校

司書教諭　九渡（くどう）愛美（めぐみ）

◎神奈川県横浜市／校長：黒畑勝男／生徒数：１２１１人
◎特色：校訓「人になれ 奉仕せよ」のもと、キリスト教精神を軸とした教育を展開。２０１４年からの教育改革で「地球市民講座」や「言語力活用講座」という学校設定科目を設置するなどして探究型の学びを進化させている。21年度よりＮＩＥ実践指定校となり、「いっしょに読もう！新聞コンクール」では、３年連続で中学校部門の学校賞を受賞。

生徒、教職員がフラットな立場で話し合う（神奈川新聞社提供）

参加を呼びかけるチラシ

事務局長から一言

新聞を手に肩肘張らず、対話が弾む。「先輩後輩、先生とも壁がない。こういう交流はなかなかない。貴重な場」と高校1年生。「話題が豊富だし、膨らんでいくのが面白い。どうしてそう考えるのか、他の人の意見に触れられる。すごく楽しい」

司書教諭の九渡愛美さんが、当協議会の月例会などでＮＩＥの役割について認識を深めながら、情報活用の教育拠点である学校図書館と新聞活用を組み合わせ、創意工夫を重ねている。

新聞を生きた教材に、社会に目を向け、自由闊達（かったつ）な対話で多様な価値観に触れ、考えを深める。放課後Cafeは、生徒たちが主権者としての自覚を育む場になっている。

（神奈川県ＮＩＥ推進協議会事務局長・藤塚正人）

母校である新潟大学教育学部では、新潟日報社による「ＮＩＥ寄付講座」が行われており、私はそこで講師を務めている。先日、学生が「大丈夫です」と言ったので、思わず「どっちの意味だよ」と応じてしまった。教師になるのだから分かりやすい日本語を使ってほしいと願いを伝達。◆昨年3月に退職した小学校の周年記念式典に、校歌を作詞作曲してくれた地元出身の歌手・小林幸子さんが来訪した。校長時代に私の笑顔の写真入りの依頼ＦＡＸを送り続けたから来てくれた……のだと信じている。小林さんが子どもたちに言った。「美しい日本語があるのだから『やばい』は使わないようにしよう」と。大賛成！◆大学生から小学生まで、新聞を通じて言葉の力や日本語の美しさをしっかり教えていきたい。そのためにも、私はＮＩＥの旗を振り続ける！**（新潟県ＮＩＥ推進協議会・宇ノ井修二）**